

過去に学び、未来へつなぐ 児童の人権作文に学ぶ

今回は、西田衣織さん(作文制作時は星野小学校6年生)の人権作文から、命と平和の尊さについて考えましょう。

「戦争のない世界へ」

今、私たちは当たり前のように家族と過ごし、友だちと勉強したり遊んだりして楽しい毎日を過ごしています。しかし、日本が戦争をしていたころ、それは当たり前のことではありませんでした。過去の過ちを繰り返さないために、私たちは戦争について正しく知り、今後、戦争のない平和な社会の実現に向けて、みんなが力を尽くしていかなければならないと考えます。

先日、総合的な学習の時間「星野村平和の灯」の学習で、星野村



西田 衣織さん
(作文制作時 星野小学校6年生)

に原爆の火を持ち帰った山本達雄さんの息子である山本拓道さんに話を聞きました。

今から、七十六年前、豊かな広島町の町が赤い炎に包まれました。山本達雄さんは、広島市の駐屯地から司令部に列車で移動中でした。まぶしい光と、ものすごい爆風で列車もろともなぎ倒されました。それは、突然の出来事でした。何とか一命を取り留めた山本さんは列車から降りると、赤く燃えている炎へと向かって行きました。

「助けてください。」
という声と共に、
「水を下さい。」

と言いながら多くの人が山本さんへ救いを求めてきました。山本さんは、自分が持っていた水筒の水を少しずつ分け与えていきました。皮膚が焼け、ただれ落ち、苦しむ人々が、「兵隊さん、もう殺してください。」とお願ひしてきたそうです。助けたいが病院もなく、どうすることもできなかつたそうです。この時山本さ

んには、言葉では表しようもない苦しみや悲しみがあつたと思います。このことは、終戦後いつまでも忘れることができなかったそうです。

そして、復員命令後も広島に残り、山本さんを特にかわいがつてくれた叔父、弥助さんを探しました。

(お世話になつた叔父の遺骨のひとつかけらでも拾わなければ帰郷できない) そんな思いだつたと思います。そんな時、がれきの下でくすぶり続ける残り火を見つけました。掘り起こし、息を吹きかけると、炎がポーッとあがり弥助さんが息を吹き返したように思えたのです。その火をカイロに移し、消えないようにと、ふところにかかえ、必死の思いで星野村までたどり着きました。山本さんは、二十三年間火を絶やすことはありませんでした。その火を見ると豊かな広島町の、たくさんの命、そして父親のようにかわいがつてくれた叔父を思い出すと共に、それらを奪つたこの火を恨まずにはいられなかつたそうです。(この火でアメリカを同じ目に合わせてやりたい) そのままで考えたそうです。でも、山本さんは長い葛藤の末、恨みや憎しみだけでは問題は解決できないことを悟りました。そして当時、子どもたちに、この平和の広場でこう語つたのです。

「人間同士が殺し合う愚かなことは

やめないといけない。戦争はいかなる理由があつても絶対にしてはいけない。」

これがこの火に込められた、そして現在も変わらぬ祈りだと私は考えます。

この火について、そして平和な世界を築いていくために私が強く思つたことは、小さなことでも、自分の思いや立場ばかりを考えず、相手の思いや立場を大切にするといいこと、そして、たとえいさかいがあつても、いつまでも相手を恨み続けていてはならない。世の中の平和は築けないということです。私は、これから相手を思いやる心を忘れず、物事について話し合つて考えていくことで、いろんな問題を解決していきたいと思ひます。

私たち若い世代が戦争の恐ろしさや悲惨さについて知ると共に、戦争が二度と繰り返されることのないようにしっかりと行動していきたいです。

身近な地域の人の話に、大切なことを学んだ西田さん。

いまでも世界各地で紛争が起きており、改めて平和の大切さが問われていきます。過去の歴史から教訓を学び、私たち一人一人が平和な世界を実現するためにできることを実行していきたいですね。